



夏の盛りは浅草を走っていると白人の旅行者が多い。といっても場所柄スーツケースごろごろなんてのはほとんど見ない。到着したか出発するのは、大きなザックを背中にして、ディパックを前に担いでいる。ビニール袋に土産をいっぱい持っているのは、これから自分の国に帰るんだらう。ショルダーバッグくらいでビーチサンダルばき、安い飯屋の前で品定めをしているのは、滞在中の若いグループ。スニーカーをはいて、ディパックという正統旅行者スタイルは小学生くらいの子供たちを従えた若夫婦か。ちょっといい靴を履いているのはお年よりの友達同士。

朝、浅草の路地から走り出てきた、年のころは50代のひよろつとしたやせ面、ごま塩あたまの彼は、これから大移動なのか、大きなザックを背負って、前にはディパック。左手に、これがおもしろかったが、富士山の登山杖。いくつか印が押してあって、鈴やらなにやら結びつけたのを、ちりんちりんとして振り回して駆け去って行った。ああ、富士山に登りたくて来たんだな。満足出来ただろうか。あこがれてきて、がっかりしたらかわいそうだが、あの走るエネルギーならまあ、いいか。そんなことを考えながら、ママチャリをゆっくりこいでいきます。

180円のラーメン屋の前には、半ズボンビーチサンダルの5人組が背中を丸めて、看板に出ているメニューの写真をしながら、じっくりと話し合っている。大きなザックに埋まるような娘さん二人が、地下鉄の出口で一生懸命地図を見て話し合っている。みんな良いたびをしているなあ。

こういう景色を見ていると、日本の青少年は外国でこうやって、生き生きとした旅をしているだろうかと不安に思います。ツアーは楽しめ安から好きだけれども、せめて若いときは航空券と、少ない金を握りしめて、不安と期待に胸をいっぱいさせながら、電車やバスを乗り間違えたりしながら行く旅をしてほしいものだ。・・・と書いていて、そういえば、昨年はロンドンで電車を乗り間違えて、すぐすぐ戻ってきたり、船の降り間違えて、飛行機の時間を気にしながら大回りをしてしまったりそれでもパブでビールを飲んで、間に合うだろうかと急いだりしていたことを急に思い出した。その他もろもろの失態、不具合、不安がいっせいに立ち上がってきた。まあ、青少年でなくても、そういう旅の姿勢は、あんまり多いと困るが必要だ。順調で楽しい旅はもちろん良いが。本当に心に残り、人を育てるのはそういった、うまくいかなかったことごとだと私は思っている。もともと、これ以上育ったり、学ぶなんてのはまっぴらだ、という向きには勧められない。でも、こんどのヒースロー空港の爆破未遂関連で、お客さんの荷物が1万個行方不明だという。そのうち発見され戻ってきたのが5千個くらい。ツアーだって十分そんなことはありうる。そんなときに空港の荷物ターミナルを走り回って探したり、乗り換えるときに荷物も一緒に乗り換えるか不安だから、確認したいといったら、見事に滑走路上の機体の下に私たちの荷物だけがごろんごろんと転がっていて、すべてチェックさせられたりしたことごとなどが、なんとと言うか、生きる力みたいなものになって、荷物の一つや二つ、なくなっても、どうと言うことはなくなり、乗るべき飛行機がなくても、何とか、そっちの国の方面へ飛んでいける力になるものだ。飛行機が飛べずにその辺で寝なければならぬときに、あたりまえのように動ける。どこでも寝る場所を確保できる。旅に出ているときに飯が三度三度食べるなんて考えていない。食えるときに食べておく。そんなのばかりでも大変だが、旅の季節に、外国の青少年を見ていて、そんなことを考えていた。旅に出たいなー。

